低下する当主の威信と離反する家臣団が続出！草刈場となった今川王国

義元左文字
今川義元の差料で、もとは武田信虎（信玄の父）が娘の定恵院を嫁がせる際に持たせた。この刀剣を戦利品とした織田信長は、「織田尾張守」と刻印させた。
建勲神社所蔵

決して凡庸ではなかった氏真 治水事業や経済政策で功績も

ふつうには、永禄3年（1560）5月19日に桶狭間の戦いで義元が討ち死にしたあと、家督を子の氏真が継いだと考えられているが、実際は、すでに弘治3年（1557）正月以前に氏真が家督を継いでいた。文書の発給状況をみると、永禄元年（1558）以降、義元の文書は遠江・三河方面に集中し、氏真の文書が駿河に集中している。つまり、義元は、駿河支配を氏真にまかせ、自らは新領土の遠江・三河支配に乗り出していたことがわかる。

したがって、氏真は、世間でいわれているような、和歌にのめりこみ、闘鶏にうつつをぬかしてばかりいたわけではなかった。残されている文書からも、氏真が灌漑用水の水源地開発を行ったり、富士宮門前の富士大宮を楽市にするなど、父義元がやってこなかったような新しい施策に取りくんでいたことが知られている。

しかし、そうした努力にもかかわらず、氏真にはきびしい状況が生まれていた。それは、三河で松平元康（のちの徳川家康、以下、家康と表記）が自立の動きをみせはじめたからである。家康は桶狭間の戦い後、本来、自分の居城だった岡崎城にもどり、桶狭間の戦いの翌年、永禄4年には西三河の征圧にほぼ成功している。

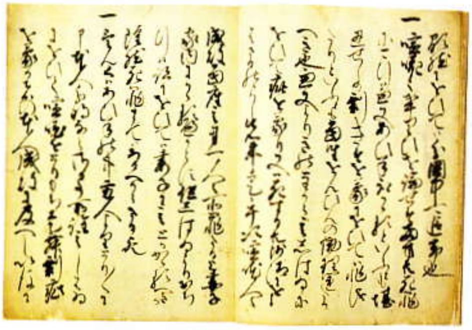
そうした状況を、氏真は「松平蔵人逆心」とか「参州錯乱」といって危機感をつのらせているが、家康方となった三河の元今川家臣たちの人質をみせしめのように処刑するだけで、家康の三河での自立をくいとめることはできなかった。

結局、家康は西三河だけでなく、東三河の征圧にも成功し、氏真は駿河・遠江2カ国の確保に全力を注ぐことになった。

そして、この時期におきたのが遠江の井伊谷城主井伊直親誅殺事件である。井伊家では、直盛が桶狭間で義元と一緒に討ち死にしており、その養子となっていたのが直親で、直親の家老小野但馬守から氏真に「直親が家康に内通している」との報告があった。驚いた氏真は直親に駿府への出頭を命じたのである。

その命令に直親が従っているので、本当に直親が家康に内通していたかどうか疑問ではあるが、直親は途中、掛川城下で掛川城主朝比奈泰朝によって誅殺されてしまった。朝比奈泰朝が氏真の指示を受け、途中で殺したのか、朝比奈泰朝の独断だったのかはわからない。しかし、このころになると、遠江の今川氏家臣の中から、家康につく動き、さらには武田信玄につこうとする者も出てきて、氏真はその様子を「遠州忩劇」と表現している。

永禄6年（1563）には、富士



今川仮名目録
7代氏親が制定した分国法（全33ヶ条）。分国法とは自国領内のみ通用する法律で、今川家では他の戦国大名に先立ち導入を図った。
明治大学博物館所蔵

掛川城跡（古城）
武田信玄の駿河侵入の際、氏真は筆頭家臣・朝比奈泰朝とともに籠城するが、徳川家康の攻撃を受け開城。現存する掛川城とは異なる。

今川氏真

第10代当主。後世に流布されたような暗愚な人物ではなく、父・義元が実施しなかった治水事業、楽市政策も手掛けた。近隣にいたライバルが強敵・武田信玄、徳川家康だったという不運は大きい。「集外三十六歌仙」姫路市立美術館所蔵

氏や朝比奈氏、さらに井伊氏にも命じて、家康方になろうとした引馬城の飯尾連龍を攻めさせている。しかし、そうした氏真の努力にもかかわらず、事態は悪化していった。三河を切り従えた家康が遠江をうかがう様子をみて焦ったのは武田信玄である。信玄は「甲相駿三国同盟」を結んでいるので、本来は氏真に救いの手をさしのべなければいけない立場だったが、「このまま手をこまねいていると、家康に遠江まで取られてしまう」と考えた。もちろん、信玄の嫡男・義信はそれに反対した。義信の妻は今川義元の娘だったからである。ところが信玄は、義信を廃嫡し、寺に幽閉してしまった。

このあと、義信は自刃している。

武田信玄

信玄の支配する自国甲斐、侵略した信濃はいずれも山国であった。太平洋に面した駿河は、海運の利便性もあり、経済発展の見地からも垂涎の土地であった。山梨県立博物館所蔵

戦国大名としては滅亡するが 高家となって家名は存続

信玄が氏真と断交したのがいつなのかはくわしくはわかっていない。ただ、永禄10年（1567）8月以前らしいことが推測される。というのは、世に有名な氏真による甲斐への「塩止め」がその年の8月17日以前に行われていたことが確実だからである。

このあと、信玄と家康の間で今川領分割領有の密約が結ばれ、翌永禄11年12月、信玄と家康が同時に今川領に攻めこんだ。氏真は駿府今川館を守ることができず、重臣筆頭朝比奈泰朝の掛川城に逃げこんだが、今度はそこを家康に攻められているのである。

翌12年5月17日、氏真は降伏して掛川城を出て、妻の実家である北条氏を頼って行った。ここにおいて、戦国大名としての今川氏は滅亡した形となった。

氏真はその後しばらく小田原で生活したが、元亀2年（1571）10月3日、妻早川殿の父北条氏康が亡くなったことで小田原にいられなくなり、浜松城の家康を頼っている。家康は氏真を保護し、天正3年（1575）5月の長篠・設楽原の戦いで武田勝頼を破ったあと、8月、武田方の諏訪原城を落とし、名を牧野城と変え、何と、氏真をその城主として迎えているのである。今川義元の「人質」となっていたとき、義元から受けた恩の恩返しのつもりだったのかもしれない。

しかし、家康も氏真に一軍を指揮させ、一城を預けるに足る力量がないとみて結局、氏真は牧野城主を解任され、浜松・駿府・京都と転々とし、その間に出家し、宗誾と名乗り、京都の公家たちの歌会に顔を出していたことが知られている。

晩年は家康から捨扶持の形で500石を与えられ、江戸に居住している。慶長19年（1614）12月28日に没した。なお、氏真の孫にあたる直房が高家となって家名は存続した。

今川家と武田・北条家　関係図

武田、北条、今川の利害が一致し、三者の間で甲相駿三国同盟が締結される。桶狭間の戦いで今川義元が戦死すると、そのパワーバランスが崩壊。その隙を突いて、信玄は今川領への侵攻を開始する。